

福島避難者「もっと原発論議を」 福島から都知事選に思う

—福島・桑折（こおり）—

「東京電力福島第一原発から北東へ約 70 km。福島県桑折町のプレハブ仮設住宅には、浪江町から避難する約 360 人が暮らす。

友人 2 人と仮設住宅前で話していた M さん（66）は、「原発の電気を東京で使っておいて、何をいまさらっていう感じ」と突き放す。だが、原発論議に消極的な都民や候補者がいることを知ると複雑だ。「東京の人は私達を忘れてるんじゃないか。同じ目に遭わないとわかんないんだよ」

近くでは重機が除染を続け、マスクをつけた作業員の車が行き交う。自治会長の O さん（68）は原発が論議されることを評価し、「もっと関心を持って」と言う。元建設会社役員。福島第一原発で工事の検査を終え、門を出て揺れに襲われた。「安全な原発なんてあるのか」。今は悩む。

事故を忘れたかのように深夜まで明るい東京に腹が立つ。原発事故の避難者は約 14 万人。「避難者は全国の千分の 1 しかないが、東京には全国民の 10 分の 1 もいる。その判断が与える影響は大きい」

「都民も現場知って」 福島も見つめる 1 票

—福島・いわき—

「いわき市内には第一原発周辺から避難した約 2 万 3 千人が住む。市南部の工場に隣接して建ち並ぶ双葉町の仮設住宅では、美容師の M さん（63）が花壇に水やりをしていた。「ここは雨がふればバチャバチャ言うし、お隣には声は筒抜けだし、最低限度以下よ」

都知事選で 2020 年東京五輪が話題に上がっていると知った。「安心して住む場所もない私からしたら、遠い 6 年後の話より大事な話がある気がする」と言い、こう続けた。

「東京の電気のために私たちは家を追われた。関心がない都民が多いのにはがっかり」

仮設のリーダーは、600 年続いたという農家の S さん（64）。妻（62）、母（86）と暮らす。名刺の裏には、大きな葉がピンとはったホウレン草の写真。震災直後に避難した東京で、八百屋から言われた言葉は今も思い出すと怒りがこみ上げる。「電気、福島で作ってたんですね」

自宅は原発から約 3 km。荒れ果て、床も落ちた。それでも子孫の代に戻る日が来ることを願う。「脱原発というなら、道筋をきっちり考えて欲しい。原発推進というなら、双葉町の俺の家に住んでみたらいいさ」（「朝日新聞」1 月 29 日付け）

【疑問】 都知事選の H 候補、原発再稼働をさせた張本人、野田元首相の応援をなぜ受けるのか？